

古英語と中英語における非人称構文の統語構造

神 谷 昇

千葉大学・教育学部

On the Structure of the Impersonal Construction in Old English and Middle English

KAMIYA Noboru

Faculty of Education, Chiba University

本稿では、古英語 (Old English; OE) と中英語 (Middle English; ME) に見られる非人称構文の統語構造について検討する。非人称構文は論理的な主語を持たず、心理状態を描写する動詞が用いられている非人称構文では多くの場合、与格または対格を持つ名詞句が動詞の前に置かれ、動詞が3人称単数形で表出するという特徴を持つ。この事実について、英語の方言であるBelfast EnglishやAppalachian Englishで観察される「単数呼応 (singular concord)」に課せられる制約とIP領域には主語が出現できる位置が複数存在するという提案を考慮に入れ、OEやMEで心理状態を表す動詞の直前に置かれる名詞句はIP領域の主語位置の1つであるSubjPの指定部位置にあり、それが単数呼応を誘発し、その結果として動詞が3人称単数形で表出することを提案する。

キーワード：古英語 (Old English) 中英語 (Middle English) 非人称構文 (The Impersonal Construction)
主語 (subject) 単数呼応 (singular concord)

1. はじめに

本稿の目的は、古英語 (Old English; OE) および中英語 (Middle English; ME) における「非人称構文」と呼ばれる構文の統語構造について検討することである。先行研究によると、非人称構文は自然現象や心理状態などを表す「非人称動詞」と呼ばれる動詞 (OEでは約40語、MEでは約80語) により構成され、論理的主語が出現せず、動詞が3人称単数形で表出するという特徴を持つ (ただし、一部の非人称動詞では形式主語が表出することもある)。また、心理状態を描写する動詞が非人称構文に用いられる場合には、経験者を表す名詞句が動詞の前に置かれることが多く、それは与格または対格で標示された (以上、中尾・児馬 (編著) (1990)、安藤 (2002)、橋本 (2005)、堀田 (2009) など)。例えば以下の(1)は自然現象を表す動詞が使用されているOEの非人称構文の例であり、(1a)では形式主語のhit (= 'it') が表出しているのに対して、(1b)では主語が欠落している。

- (1) a. þa *rinde hit*, and þær comon flod, (*Matt.* 7: 27)
'then it rained, and there came the flood'
b. Nap nihtscua, norþan *sniwde*, (*Seafarer* 31)
'The shadow of night darkened, (it) snowed from the north'
(安藤 (2002 : 106) を改変)

(2)はOEの心理状態を描写する動詞が非人称構文に使用されている例であり、斜体を付した動詞の直前に意味上の主語であり経験者の意味役割を持つ名詞句が置か

れている。

- (2) a. siððen *him hingrode* (Ælfric) [himは与格] (OE)
'afterward *φ* hungered him, ie he hungered'
(安藤 (2002 : 107) を改変)
b. *mē dyncð betre* (OE)
'to-me seems better' (= 'it seems better to me')
c. *mē lyst rædan* (OE)
'to-me pleases to-read' (= 'it pleases me to read')
((2b, c) : 橋本 (2005 : 171-172) を改変)
d. *Hir thoughte* that a lady sholde hire spare (ME)
'to-her thought that a lady should spare herself'
(= 'it seemed to her that a lady should spare herself')
((2d) : 堀田 (2009) を改変)

上記に加え、以下のような例も非人称構文であると考えられている。

- (3) a. *mē wære betra gān* (OE)
'to-me were better go'
(= 'it would be better for me to go')
(橋本 (2005 : 173) を改変)
b. *Hym boes serve himselve* that has na swayn (ME)
'to-him behooves to-serve himself that has no servant'
(= 'it behooves one that has no servant to serve himself')
(堀田 (2009) を改変)

連絡先著者：神谷 昇 nkamiya@chiba-u.jp

本稿では、経験者の意味役割を持ち、意味上の主語であると考えられる名詞句が動詞の直前に表出している(2)のような非人称構文に焦点をあて、その統語構造について検討する。特に、これらの構文で経験者を表す項が主語と同等の性質を持つという指摘 (Cole, Herbert, Herman, and Sridhar (1980), 石川 (1996) など) と、動詞が3人称単数形語尾をとまなう事実に着目し、OEやMEの非人称構文は英語の方言であるBelfast EnglishやAppalachian Englishで観察される単数呼応 (singular concord) と同等の性質を持ち、非人称構文の統語構造もこれらの方言の持つ統語構造と類似していることを示唆する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、非人称構文の中でも心理状態を表す構文の特徴について詳しく検討する。第3節では、非人称構文の構造を検討する上で重要であると考えられるBelfast EnglishとAppalachian Englishの単数呼応について概観する。第4節では第3節で概観した単数呼応の分析を非人称構文の分析に援用し、非人称構文 (の一部) も単数呼応の一例として捉えられることを主張する。第5節は本稿のまとめである。

2. 非人称構文の特徴

前節ではOEとMEの非人称構文の例を挙げ、その特徴を概観したが、本節では、その中でも心理状態を描写する構文の持つ特徴についてさらに詳しく考察する。前節で見たように、この種類の構文では動詞の直前に与格または対格の名詞句が置かれることが多く、同時に、動詞に別の項が後続することがある。本節では先行研究に基づき、与格・対格名詞句は主語と同等の性質を持つこと、および、心理動詞に後続する項の種類に応じて非人称構文を3タイプに下位分類できることを議論する。

はじめに心理動詞の直前に生起する名詞句の性質について検討する。先行研究では様々な基準から、当該の名詞句は典型的な主語と同等の性質を持っていることが指摘されている (Cole, Herbert, Herman, and Sridhar (1980), 石川 (1996) など)。紙幅の都合上、本稿ではその中でも「主語の繰上げ」 (Subject-to-Subject Raising; SSR) と重文の名詞句削除に課せられる制約を取り上げ、当該の名詞句は「主語」であることを示す。

まず、前者について検討しよう。現代英語ではseemなど一部の動詞において、不定詞補文の主語が主文の主語位置に移動することが知られている。例えば(4)では、不定詞補文の主語位置に基底生成されたJohnが (格付与/照合上の理由などにより) 主文の主語位置に移動していると考えられている。

- (4) John seems to be sick.
cf. It seems that John is sick.

この例で重要な点は、補文の主語が繰上げの対象となっている事実である。この点を踏まえて(5)をみてみよう。

- (5) bā ongan hine eft langian
then began him (ACC) again V[ACC] (INF)

on his cȳððe
for his kith
'Then he began to long for his kith'
(Blick. Hom. 113 : 15, A. D. 971)
(Cole, Herbert, Herman, and Sridhar (1980 : 729))

Cole, Herbert, Herman, and Sridhar (1980) は(5)に挙げるOEの例において、動詞 langian 'to desire, long for' は繰上げ動詞 ongan 'begin' の埋め込み文中に生起すること、また、補文動詞の項であり、経験者として解釈される名詞句 hine が対格を保持した状態で繰上げの対象となっていることを指摘している。(4)で観察した、「補文の主語が繰上げの対象となる」という制約を踏まえると、この例では経験者として解釈される名詞句は、主語と同等の性質を持つがゆえに繰上げの対象となっていると考えられる。

次に重文における名詞句削除に課せられる制約について検討する。よく知られているように、等位接続詞により2文が等位接続された場合、接続詞に後続する文において削除できるのはその文の主語であり、また、それは等位接続詞に先行する文の主語と同一物を指示しなければならない (Comrie (1978))。例えば、(6)ではand以下の文の主語が削除されているが、それはandに先行する文の主語を指示するので文法的である。

- (6) The man came here and ___ hit the woman.
(Comrie (1978 : 347) を修正)

上記の制約を踏まえて(7)の例文を検討しよう。

- (7) Lewed men leued hym well and liked his wordes.
'Ignorant men loved him well and his words pleased [them].'
(Langland, *Piers Plowman*, prol. 72, A.D. 1362)
(Cole, Herbert, Herman, and Sridhar (1980 : 729))

この例において重要な点は、and以下の文で対格を付与され、経験者の意味を持つthemに相当する要素が削除の対象となっている事実である。(6)で議論した制約を踏まえると、(7)では第2文の'them'が主語としての性質をもつために削除の適用を受けていると考えられる (Cole, Herbert, Herman, and Sridhar (1980))。

以上では心理動詞の前に置かれることの多い名詞句の性質について考察し、それは主語と同等の性質を持つことを観察した。続いて、心理動詞に後続する要素の性質により、OEとMEの心理動詞が3つのタイプに下位分類できることを見る。石川 (1996) によれば、心理動詞は、(8a)に挙げる、動詞に主格名詞句が後続するタイプ、(8b)に挙げる、動詞に節が後続するタイプ、そして、(8c)に挙げる、動詞に前置詞句が後続するタイプに分類することができる。なお、(8)において、Dat/Accは経験者 (Experiencer) の意味役割を持つ与格名詞句/対格名詞句を、Vは動詞を、Nomは主題 (Theme) の意味役割を持つ主格名詞句を表している。また、Clauseは主題の意味役割が付与される節を、PPは前置詞句を表す。

- (8) a. Dat/Acc V Nom
b. Dat/Acc V Clause
c. Dat/Acc V PP

(9)–(11)が上記3タイプの非人称構文の具体例である。

- (9) Dat/Acc V Nomタイプ
- a. (OE) ...and him (dat.) næfre syþþan ...
 and him never since
 seo adl (nom.) ne eglode
 the illness not troubled
 (and the illness never troubled him
 afterwards)
 (*Prose Guth;* Goodwin (1848 : 60))
- b. (ME) me (obj.) bihoueþ his help (nom.)
 me has need his help
 (*HM* 37, 384)

- (10) Dat/Acc V Clauseタイプ
- a. (OE) wel me (dat./acc.) licað þæt
well me pleases that
þu cwiðst
you say
(GD(C) 70.32) (Ogura(1986 : 109))
- b. (ME) hem (obj.) lyketh to be clene
him pleases to be clean
(Ch. WB 97)

- (11) Dat/Acc V PPタイプ
- a. (OE)
- | | | | | |
|-----------|--------|-------------|-------|-----------|
| hi | (acc.) | befofiað | | engla |
| them | | has need of | | angel's |
| fultummes | (gen.) | on | ðisum | life |
| help | | | in | this life |
- (*AHom* I.11.170.6)
(Healey and Venetzký (1980))
- b. (ME)
- | | | | | |
|-------------|--------|-------------|----|-------|
| me | (obj.) | forthynkith | of | youre |
| me | | regrets | of | your |
| displeasure | | | | |
| displeasure | | | | |
- (*Mal.* 66, 11)
((9)-(11) : 石川 (1996))

(8a) のタイプの心理動詞については、動詞はそれに後続する主格名詞句（主題項）と数と人称に関して一致することにも注意されたい。この事実は(12)に例示されている。

- (12) a. OE
bam cynge (dat.) licodon (3pl.) peran (nom. pl.)
the king liked pears
- b. ME
the king (dat.) liceden (3pl.) peares (nom. pl.)
the king liked pears
(Jespersen (1927 : 209))

上記の事実から石川は、(9)に示すタイプの心理動詞は(10)と(11)に示すタイプの心理動詞と派生や統語構造が異なることを提案している（詳細は後述）。本稿でも石川の主張を採用し、心理動詞は3タイプに分類でき、動詞に主格名詞句が後続するタイプと、動詞に節やPPが後続するタイプとでは統語構造が異なっていることを第4節で主張する。

以上、本節では、非人称構文で使用される心理動詞について概観し、与格または対格を持つ名詞句は主語と同等の性質を持つこと、そして、当該の動詞は動詞に後続する要素により3タイプに下位分類できることを見た。次の第3節では、これら非人称構文の構造を検討する上で重要な役割を果たすと考えられるBelfast EnglishやAppalachian Englishにおける単数呼応について概観する。

3. 単数呼応について

本節ではHenry (1995) やTortora and den Dikken (2010) で議論の対象とされている, Belfast EnglishやAppalachian Englishに見られる単数呼応について考察する。はじめにこれら英語の方言で観察される単数呼応の事実について概観し, その後, Tortora and den Dikken (2010) の分析を取り上げる。

まず、単数呼応の事実について考察する。現代の標準英語では通常、動詞は主語の(性・)数・人称に応じて義務的に一致しなければならない。例えば(13)は標準英語の例であり、動詞likeは主語の人称と数に一致し、いわゆる「3単現の-s」が動詞の語尾に表出しなければならない。

- (13) a. She likes cats.
b. *She like cats.

これに対して英語の方言であるBelfast EnglishやAppalachian Englishでは、動詞が主語と一致せず、3人称単数形で表出することがある。例えば、(14)–(16)のaの例から明らかなように、Belfast Englishでは、動詞が主語に一致せず、3人称単数形として表出することも可能である。このように、動詞が主語の性・数・人称に一致せず、3人称単数形で表出することを「単数呼応(singular concord)」と呼ぶ。なお、ここに挙げた例については、各例のbに示すように、動詞が主語の性・数・人称に一致しても良い。

- (14) a. The children is happy.
b. The children are happy.
- (15) a. The girls likes pizza.
b. The girls like pizza.
- (16) a. The children has arrived.
b. The children have arrived.

((14)–(16): Tortora and den Dikken (2010) を改変;
Henry (1995) も参照)

また、(17)と(18)はAppalachian Englishの例であり、
ここでもBelfast Englishと同様に、単数呼応が見られる。

- (17) a. Those boys is plumb foolish.
 b. Those boys are plumb foolish.
 (18) a. The potatoes looks awful.
 b. The potatoes look awful.
 (Tortora and den Dikken (2010) を改変)

上記のようにBelfast EnglishやAppalachian Englishでは単数呼応が観察されるが、単数呼応が常に可能であるとは限らないという点にも注意しなければならない。例えばBelfast Englishでは、(19) – (24)の例から明らかなように、主語位置に主格代名詞が生起していると単数呼応が許容されず、動詞は主語と一致しなければならない。

- (19) a. *They is happy.
 b. They are happy.
 (20) a. *We is happy.
 b. We are happy.
 (21) a. *Youse is happy.
 b. Youse are happy.
 (22) a. *They likes pizza.
 b. They like pizza.
 (23) a. *We likes pizza.
 b. We like pizza.
 (24) a. *Youse likes pizza.
 b. Youse like pizza.
 ((19) – (24) : Tortora and den Dikken (2010) を改変;
 Henry (1995) も参照)

なお、上記の例で主語位置に生起している主格代名詞を「格の標示に関してあいまい (case-vague)」な形態、つまり、特定の形態を保持したまま主格や対格が付与される位置に生じることができる形態、に置き換えると単数呼応が許容される。(25) – (30)を見られたい。

- (25) a. Themuns is happy.
 b. Themuns are happy.
 (26) a. Themuns likes pizza.
 b. Themuns like pizza.
 (27) a. Usuns is happy.
 b. Usuns are happy.
 (28) a. Usuns likes pizza.
 b. Usuns like pizza.
 (29) a. Yousuns is happy.
 b. Yousuns are happy.
 (30) a. Yousuns likes pizza.
 b. Yousuns like pizza.
 ((25) – (30) : Tortora and den Dikken (2010) を改変;
 Henry (1995) も参照)

上記(19) – (24)と(25) – (30)の対比から、Henry (1995)やTortora and den Dikken (2010)はBelfast Englishにおいて単数呼応を誘発するのは主語位置にある主格を持たない名詞句であると考えている。

次にAppalachian Englishにおける単数呼応について考察する。(31a)と(32a)がその例である。なお、(31b)と(32b)

から明らかなように、この例では主語と動詞が一致しても良い。

- (31) a. Those boys is plumb foolish.
 b. Those boys are plumb foolish.
 (32) a. The potatoes looks awful.
 b. The potatoes look awful.
 ((31), (32) : Tortora and den Dikken (2010) を改変)

上記のように、Appalachian Englishにおいても単数呼応が観察されるが、それを引き起こす要因はTortora and den Dikken (2010)によれば、主語の「複雑性 (complexity)」である。つまり、複雑な構造を持つ名詞句が主語位置に生起すると、(31a)や(32a)のように単数呼応が誘発されうが、(33) – (36)に挙げる例から明らかなように、単純な構造を持つ主語は単数呼応を誘発しない。

- (33) a. *They is old friends.
 b. They are old friends.
 (34) a. *We is old friends.
 b. We are old friends.
 (35) a. *They plows their corn in June.
 b. They plow their corn in June.
 (36) a. *We plows our corn in June.
 b. We plow our corn in June.
 ((33) – (36) : Tortora and den Dikken (2010) を改変)

以上の議論をまとめると、Belfast Englishでは主語の非主格性が、また、Appalachian Englishでは主語の複雑性が単数呼応を引き起こす要因であると言える。この事実からTortora and den Dikken (2010)は伝統的にIPと考えられていた句は(37)に示すような複数の投射から形成される句であることを仮定した上で、主語は[Spec, SubjP], [Spec, AgrsP]および[Spec, TP]のいずれかに生起すること、そして主語が生起する位置が方言間において異なることを提案している (主語が生起する位置については, Cardinaletti (2004) や Rizzi (2006) も参照のこと)。

- (37) [SubjP ____ Subj [AgrsP ____ Agrs [NegP Neg [TP ____ T [...]]]]

具体的には、Belfast Englishでは主格を持つ主語は[Spec, AgrsP]に生起し、動詞はその主語と一致しなければならないが、主格を持たない主語が[Spec, TP]に生起した場合、動詞は主語と一致せず、単数呼応が生じる。また、Appalachian Englishについては、複雑な構造を持つ主語は[Spec, SubjP]に生起することができ、その場合には動詞は主語と一致せず、単数呼応が生じる。また、主語が[Spec, AgrsP]に生起した場合には、主語と動詞が義務的に一致する。例えばBelfast Englishの例である(22b) (以下に(38a)として再掲)は(38b)の構造を持つ (なお、以下の構造では当面の議論と関係がない部分は省略する)。

- (38) a. They like pizza. (= (22b))
 b. [AgrsP they [TP like pizza]]

この例で主格主語のtheyは[Spec, AgrsP]に生起しているので、動詞と主語が一致しなければならない。

また、Belfast Englishの例である(28a)(以下に(39a)として再掲)は(39b)の構造を持ち、主語が[Spec, TP]に位置しているために動詞と主語が一致せず、単数呼応が生じている。

- (39) a. Usuns likes pizza.
b. [_{TP} Usuns [_{VP} likes pizza]]

同様に、Appalachian Englishにおいて動詞が主語と一致する場合である(35b)((40a)として再掲)は(40b)の構造を持ち、主語は[Spec, AgrsP]に生起していると考えられる。

- (40) a. They plow their corn in June.
b. [_{AgrsP} they [_{TP} plow their corn in June]]

さらに、Appalachian Englishの例である(32a)(以下に(41a)として再掲)は(41b)の構造を持ち、複雑な主語が[Spec, SubjP]に生起していることから動詞は主語と一致せず、単数呼応が生じる。

- (41) a. The potatoes looks awful.
b. [_{SubjP} the potatoes [_{AgrsP} looks awful]]

以上、本節ではHenry (1995)やTortora and den Dikken (2010)に基づき、Belfast EnglishとAppalachian Englishの単数呼応に課せられる制約を考察するとともに、方言により主語が生起できる位置が異なること、また、特定の位置に主語が生じた場合には動詞はそれと一致せず、単数呼応が生じることを概観した。次節では本節での議論を踏まえ、OEとMEにおける非人称構文の持つ特徴について単数呼応の観点から議論する。

4. 単数呼応としての非人称構文

本稿では、前節での議論を踏まえ、OEとMEに見られる非人称構文の特徴がその統語構造から導き出せることを論じる。第1節と第2節で概観した非人称構文の持つ特徴とは以下のようなものであった。

- (42) a. 論理的な主語は文中に存在しない。心理状態を表す動詞については、動詞の直前に置かれている与格・対格名詞句が主語と同等の特性を持つ。
b. 非人称構文では動詞は3人称単数形で表出する(ただし、動詞に主格名詞句が後続する場合には動詞は直後の名詞句と一致する)。
c. 心理動詞は動詞に後続する要素に応じて3つのタイプに下位分類できる。

本稿は、(42)に示す非人称構文の特徴の中でも(42a)と(42b)に関して、Belfast EnglishやAppalachian Englishに見られる単数呼応と同様に分析できることを主張する。具体的には、石川(1996)はBelletti and Rizzi (1988)

を踏まえ、心理状態を描写する非人称構文では、経験者を表し与格・対格を持つ名詞句は動詞句内に基底生成されると仮定しているが、本稿でもその仮定を採用した上で、与格・対格を持つ名詞句は派生のある段階で[Spec, SubjP]に移動すると提案する。そして、経験者項が[Spec, SubjP]に移動することによりそれが「主語」と同等の性質を持つようになると考ええる。また、動詞は基底生成された位置からTやAgrsを経由し、最終的にSubjに移動するが、Appalachian Englishと同様に、[Spec, SubjP]に位置する「主語」と動詞は一致することができず、結果的に単数呼応が誘発され、動詞が3人称単数形で表出すると提案する。この考え方に従えば、例えば、(43a)には(43b)の構造が付与される。

- (43) a. mē ðyncð betre (OE) (= (2b))
 'to-me seems better' (= 'it seems better to me')
b. [_{SubjP} mē_i [_{Subj} ðyncð_j] [_{AgrsP} t'_j [_{TP} t'_j [_{VP} [_V t_j betre t_i]]]]]

この構造で、経験者のmēがSubjPの指定部位置にあることから、それは主語と同等の性質を持ち、また、「主語」がその位置にあるために動詞は「主語」と一致せず、単数呼応が生じると考えられる。なお、石川(1996)が指摘する、心理動詞に節やPPが後続するタイプも(43b)と同様の構造を持つと考えられる。

なお、石川(1996)で取り上げられている、心理動詞に主格名詞句が後続する非人称構文の派生については以下のように考えることができる。例えば(44a)(= (12a))は(44b)の構造を持ち、派生のある段階で主格名詞句は[Spec, AgrsP]に、動詞はAgrsに移動する。

- (44) a. þam cyng(e) (dat.) licodon (3pl.) peran (nom. pl.)
 the king liked pears
b. [_{SubjP} [_{DP} þam cyng(e)_i] [_{Subj} licodon_j]
 [_{AgrsP} [_{DP} peran]_k t'_j [_{TP} t'_j [_{VP} t_k t_i]]]]]

主格名詞句が[Spec, AgrsP]に位置することから、それと動詞が一致し、その結果、動詞が3人称複数形で表出すると考えられる。その後、動詞がSubjに、与格名詞句が[Spec, SubjP]に移動し、(44b)に示す構造が得られる。

なお、(44b)の構造に示すように、動詞は最終的にSubjの位置まで移動するが、SubjPの指定部にある与格名詞句に影響されて単数呼応が誘発され、動詞が3人称単数形で表出しないことにも注意されたい。この事実については、屈折接辞の性質から導き出すことができる。よく知られているように、派生接辞とは異なり、基体に複数の屈折接辞を付加することは許容されない。この制約を踏まえると、(44)の派生において、動詞がAgrsに移動した段階でその指定部に位置する主語と一致し、動詞に屈折接辞が付加した状態になるので、Subjに移動した動詞に屈折語尾である3人称単数形をさらに付加することが許されず、単数呼応は生じないと考えられる。

また、非人称構文が現代英語で消失した原因については、以下のように考えることができる。先行研究(中尾・見馬(編著)(1990)、安藤(2002)、橋本(2005)など)では、OEやMEの名詞句の屈折が非人称構文の消失の

原因であると考えられている。つまり、心理動詞の直前に置かれていた与格・対格名詞句の屈折（格変化）が消失した結果、それは主格と同形になり、また、その名詞句は心理動詞の直前に位置することから、文の主語として解釈されるようになった。そして主語として再解釈された当該名詞句は経験者、つまり、有生物を表すことから、有生物が主語である人称構文としてみなされるようになったと考えられている。このような先行研究の知見を本稿で採用している枠組みでとらえなおすと、名詞句の屈折の消失に伴い経験者を表す名詞句が非人称構文の主語として再解釈されるようになった結果、それは主格の素性を獲得し、その照合のために[Spec, SubjP]ではなく[Spec, AgrsP]（あるいはAgrsに相当する要素が主要部である句の指定部）に移動することが必要となった。[Spec, AgrsP]に位置する要素は動詞（の持つ屈折要素）と一致しなければならない。その結果、単数呼応が許容されなくなり、非人称構文が現代英語では消失したと考えることができる。

本節での議論を終える前に、石川（1996）の非人称構文の分析について検討する。石川はChomsky（1993）の枠組みを採用し、さらに、内在格を持つ要素も格素性の照合の対象となることを仮定した上で、OEやMEにおける心理動詞の経験者項は内在格をもち、それは格素性の照合上の理由により[Spec, AgrsP]に移動すること、そして動詞が基底生成位置からAgrsに移動することにより、動詞と[Spec, AgrsP]にある主語との間で内在格の照合が行われることを主張している。例えば動詞にPPが後続する(45a)には(45b)の構造が付与される。なお、石川は、Agro(P)は(45)では不活性であると仮定している。また、石川は(45)でTは主格素性を持たないと主張している。

- (45) a. me (obj.) forthynkith of youre displeasure
me regrets of your displeasure
(= (11b))
b. $[_{AgrsP} me_i [_{Agrs} forthynkith_j] [_{TP} t'_j [_{AgroP} [_{VP} [_{V'} [V' t_j [_{PP} of\ your\ displeasure]] t_i]]]]]]$

さらに石川（1996）は、OEやMEの心理動詞に主格を持つ名詞句が後続する場合には、主格名詞句が[Spec, AgroP]に移動するとともに、派生のある段階でその位置にある主格名詞句とAgroに移動してきた動詞との間で格素性の照合が行われることを提案している。したがって、(46a)は(46b)の構造を持つ。

- (46) a. þam cynge (dat.) licodon (3pl.) peran (nom. pl.)
the king liked peers
(= (12a))
b. $[_{AgrsP} [_{DP} þam\ cyngel] [_{Agrs} licodon_j + T + Agro] [_{TP} t_T [_{AgroP} [_{DP} peran]_k t_{Agro} [_{VP} t_j t_k t_i]]]]$

石川（1996）は上記の提案に加え、現代英語で非人称構文が消失した事実については、時代変遷に伴ってAgrsの持つ素性の強さが変化したことと関連があると主張している。つまり、OEやMEではAgrsが強い素性

を持っていたために動詞がそこに移動し、動詞と[Spec, AgrsP]にある経験者項との間で内在格素性の照合が行われていた。その結果、解釈不可能な内在格素性がPFで残らず、非人称構文がOEやMEでは容認されていた。しかし、16世紀半ばにAgrsの素性が弱くなり、その結果、動詞がAgrsに移動してその指定部にある経験者項の内在格素性を照合することが不可能となった。その結果、経験者項の持つ内在格素性がPFまで残るようになり、非人称構文が許容されなくなった。したがって、非人称構文が消失した。

上述した石川（1996）の分析は、非人称構文において与格名詞句が主語と同等の性質を持つことや非人称構文が現代英語で消失した理由について説明を与えられている点が優れている。しかし、非人称構文の重要な特徴である動詞が3人称単数形で表出する事実に対する理由については触れられていない。したがって、非人称構文に使用される心理動詞の与格・対格名詞句の「主語性」を認めつつ、非人称構文の派生にBelfast EnglishやAppalachian Englishに観察される単数呼応との並行性を見出す本稿の分析の方がより好ましいと考えられる。

5. まとめ

本稿ではOEとMEで心理動詞が使用されている非人称構文の構造を検討し、与格・対格を持つ名詞句は基底生成位置から[Spec, SubjP]に移動すること、また、そのことにより単数呼応が生じ、動詞が3人称単数形で表出することを提案した。また、動詞に主格名詞句が後続する場合には、それは基底生成位置から[Spec, AgrsP]に移動し、それと動詞が一致することを示唆した。さらに、時代の変遷と共に、名詞句の屈折が消失し、動詞の直前に置かれる名詞句が主語として再解釈され、主格素性を持つようになったこと、そして、その結果、それが動詞と義務的に一致することが要求とされるようになったことを示唆した。そして、このことがOEやMEで見られた非人称構文が現代（標準）英語で消失したことの原因であると論じた。つまり、本稿で提示した分析が正しければ、OEやMEの非人称構文は単数呼応の一例として捉えることが可能であり、また、Subj(P)がOEやMEでもすでに統語構造上に存在し、使用可能であったことが示唆される。

参考文献

- 安藤貞雄（2002）『英語史入門：現代英文法のルーツを探る』、開拓社。
Belletti, A. and L. Rizzi (1988) "Psych-verbs and θ -theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
Cardinaletti, A. (2004) "Toward a Cartography of Subject Positions," ed. by L. Rizzi, *The Structure of CP and IP*, Oxford University Press, 115-165.
Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," ed. by K. Hale and S. J. Keyser, *The View from Building 20*, 1-52, MIT Press.
Cole, P., W. Herbert, G. Herman, and S. N. Sridhar (1980)

- "The Acquisition of Subjecthood," *Language* 56, 719-743.
- Comrie, B. (1978) "Ergativity," ed. by W. P. Lehmann, *Syntactic Typology*, 329-394, University of Texas Press.
- 橋本 功 (2005) 『英語史入門』, 慶応義塾大学出版会.
- Healey, A. and R. Venezky (1980) *A Microfiche Concordance to Old English*, Centre for Medieval Studies, University of Toronto.
- Henry, A. (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press.
- 堀田隆一 (2009) 「非人称構文」, *hellog~英語史ブログ*, <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-11-17-1.html>, 2017年10月3日閲覧.
- 石川一久 (1996) 「英語史における非人称構文について: ミニマリスト・アプローチによる分析」, 『愛知学院大学教養部紀要』 44, 81-94.
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles* (Part III), Allen and Unwin.
- 中尾俊夫・児馬 修 (編著) (1990) 『歴史的にさぐる現代の英文法』, 大修館書店.
- Ogura, M. (1986) *Old English 'Impersonal' Verbs and Expressions*, *Anglistica* 24, Rosenkilde and Bagger.
- Rizzi, L. (2006) "On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP effects," eds. by L. Cheng and N. Corver, *Wh-movement Moving On*, MIT Press, 97-134.
- Tortora, C. and M. den Dikken (2010) "Subject Agreement Variation: Support for the Configurational Approach," *Lingua* 120, 1089-1108.